

## 令和5年度総合教育会議議事録

- 開催日時 令和5年12月1日（金）午後1時30分
- 開催場所 本庁舎本館 807・808会議室
- 出席者 内館茂（市長）、多田英史（教育長）、玉川英喜（教育委員）、  
佐々木健（教育委員）、安藤泰彦（教育委員）、岩館智子（教育委員）
- 事務局職員  
市長部局  
中村副市長、岡市市長公室長、中嶋市長公室次長、鈴木企画調整課長、牧野企画調整課課長補佐、中村企画調整課政策調整係長  
教育委員会  
渡邊教育部長、下田教育次長、佐々木教育次長兼学校教育課長、釜崎総務課長、高橋参事兼学務教職員課長、菅原学校情報室長、佐藤総務課長補佐、馬場総務課総務企画係長
- 傍聴者 なし
- 内 容 次のとおり。

### 1 開会

（中嶋次長）

ただいまから、令和5年度盛岡市総合教育会議を開会いたします。

本日の司会進行を進めさせていただきます、市長公室の中嶋と申します。よろしくお願ひいたします。

はじめに、開会に当たりまして、市長から御挨拶を申し上げます。

### 2 あいさつ

（内館市長）

本日は、教育委員の皆様には、御多用の中、御出席いただきありがとうございます。

また、日頃から、本市の教育の充実のために御尽力をいただき、心から感謝申し上げます。

本日の会議では、「不登校対策について」「ICTを活用した教育環境の整備について」、「盛岡市の子どもたちの活躍について」の3件を議題として、意見交換をさせていただき予定としております。

教育委員会との連携を一層強化しながら、本市の未来を担う子どもたちの教育の充実を目指して、教育施策を推進していきたいと存じますので、多田教育長をはじめ、教育委員の皆様から、ぜひ忌憚のない意見をいただきたいと思います。本日は、よろしくお願ひいたします。

(中嶋次長)

ありがとうございました。

本日の会議は、構成メンバーである市長と教育長及び教育委員の全員が出席しております。

ここで、お手元に配布しております出席者名簿に従いまして 出席者のご紹介をさせていただきたいと思えます。

(構成員の出席者を紹介。事務局分は省略。)

それでは次に、次第3の議題に入る前に、本日の進め方について説明させていただきます。

議題の(1)「不登校対策について」は、お手元にあります資料の1を、議題の(2)「ICTを活用した教育環境の整備」については資料2、議題の(3)「盛岡市の子どもたちの活躍について」は資料3により進めてまいります。

なお、本日の議長は、盛岡市総合教育会議運営要綱第2の規定により、市長が務めることとなっております。

ここからの議事進行を内館市長にお願いしたいと存じます。よろしく願いいたします。

### 3 議 題

(内館市長)

それでは議長を務めさせていただきますので、よろしく願いします。

3の議題に入ります。(1)として、「不登校対策について」、教育委員会から、概要説明をお願いします。

(渡邊教育部長)

「1 不登校の状況」ですが、不登校児童生徒は、全国的に増加傾向にあり、盛岡市におきましても同様の状況で、累計欠席数が30日以上の子童生徒数は、令和2年度、小学校103名、中学校247名でありましたが、5年度は、10月末の時点で、小学校 140 名、中学校 294名となっており、特に中学校においては、令和4年度一年間の不登校生徒数とほぼ同数となっております。

このような状況から、教育委員会では、令和5年度に「不登校児童生徒支援プラン」を作成いたしました。

この支援プランについては、お手元のA3版の資料をご覧ください。

この支援プランは、「学校づくりの支援」「支援体制の整備」「学びの場の保障」を不登校対策の3つの柱として、それぞれの支援の在り方等について、資料左側に記載の「不登校対策委員会」の皆様と協議、情報共有しながら進めております。

本日は、「学びの場の保障」を中心に、ご説明いたします。

本市では、青山と仙北の市内2箇所に教育支援センター「ひろばモリーオ」を設置し、学校に行くことができない子どもたちが安心して生活を送り、仲間とのふれあいや体験活動などを通して、子どもたちの世界を広げ、自立できるようにサポートしております。

資料1をご覧ください。

「2 ひろばモリーオ（通級人数）」に記載のとおり、令和5年度は、9月末時点で、体験的に通級している仮通級を含めて、青山教室に14名、仙北教室に21名の小中学生が通い、学習や体験活動に取り組んでおり、調理実習や体育活動、休み時間の遊びなどを通して、他の通級生や指導員と関わる中で、人間関係を構築しております。

「3 いきいきスクール」についてですが、今年度は、6月から2月までの全5回を予定しており、すでに4回のスクールを終えております。

いきいきスクールは、市内の各小中学校にも案内を出しており、先ほどご紹介したひろばモリーオの通級生の他に、不登校の状況にある子どもたちも参加しております。

事業の内容としては、資料1に記載のとおり、農業やボルダリングなど、屋外で体を動かす体験活動のほか、科学実験教室や歴史・科学施設体験といった屋内での活動も行っております。

次に、「4 校内教育支援センター」についてですが、自分の教室に入れない子どもたちの学校生活を保障するため、使用していない教室を「校内教育支援センター」として活用している取組をご説明いたします。

「校内教育支援センター」については、現在、小学校16校、中学校20校が設置しております。センターの名称については、各学校で独自に付けており、それぞれ違ってはおりますが、本日は、厨川中学校の校内教育支援センターである「中央学習室」の取組をご紹介いたします。

厨川中学校では、資料に記載のとおり個別学習を基本としておりますが、学校の時間割を工夫して、1日2～3時間、それぞれの教科の教員が授業を行う出前事業と呼ばれるグループ学習を行っており、多様な学びができるよう工夫しております。

今後は、校内教育支援センターでの学びの充実に向け、Wi-Fi環境の整備や、支援スタッフの配置に取り組むとともに、ひろばモリーオの指導員が、各学校の校内教育支援センターを訪問し、センター運営や、指導の在り方について助言を行うなどの支援に取り組んでまいります。

不登校対策の説明は以上となります。

(内館市長)

ありがとうございました。教育委員会から説明がありましたが、委員の皆さまから意見をいただきたいと思います。それでは玉川委員、お願いします。

(玉川委員)

私の方からは、まず、不登校の子どもの実態についてお話ししたいと思います。不登校については、

近年、要因が非常に多様化していることを感じており、例えば個々の特性や家庭の事情、学校での対人関係など、様々な要因で不登校になる子どもたちが多くなっています。以前は「登校拒否」というような言葉で呼ばれるなど、不登校が、いわゆる「問題行動」のような捉え方をされていましたが、近年は、不登校が問題行動と言うことではなく、まずそういう子どもがいるということ踏まえ、そういう子どもに対して、学びをどのように保障して行くかということが、非常に重要な不登校対策になってきていると考えております。

そのために、現在、不登校対策について様々な機関や、制度の整備が進んでおり、校内支援センターについては、市内の中学校では20校と、ほとんどの学校で体制が取られて取り組んでいます。そこで一番重要なのは、マンパワーの問題であり、結局は、そういう子どもに対応できる人材の確保がまず必要になってくるのだと思います。

また、学校内外において、子どもの学びを保障して行くのだということを理念として持っていなければならず、例えば学校外ですと、フリースクール等があるわけですが、教育の使命（人格の形成、人間性を陶冶すること）や、学びの過程を通して人間形成をしていく、あるいは社会的な自立をめざしていくという役割を、不登校に対応する様々な機関が共通認識のもとで進めていくことが非常に重要であり、そのことが「真の学び」の保証をして行くことにつながると考えております。以上でございます。

(内館市長)

ありがとうございました。佐々木委員お願いします。

(佐々木委員)

不登校の問題が注目されはじめたのは、1960年代前半と言われており、そこから60年少々経つわけですが、この間、学校では不登校の要因を探りながら、何とか再登校に結びつけようとして、家庭と連携を取りながら進めて来たところですが、また、「不登校が生まれない学級づくり」とか「学校づくり」ということも、学校現場では一生懸命にやってきました。しかし、60年経った今でも増加傾向に歯止めがかからないというのが現状であります。

やはり、社会の大きな変化とともに、子どもたちを取り巻く環境も変わり、当初は不登校の要因を見つけやすかったが、最近では「どうして学校に行けないのか分からない」、という子どもも非常に多くなり、既存の学校教育にはなじめない、不適應の子どもたちが増えていると思われま。

私が最も懸念しているのは、こうした不登校が増加していき、その子どもたちが義務教育を終え、学校や行政との様々な関わりがなくなった段階で、家庭に引きこもってしまうことであり、義務教育の段階で、子どもたちが学校教育に入ってこられるように、例えばフリースクールなどでも個に応じた学びがあって、そこに通いながら自分自身を高め自立している子どもに育っていくようにしていくべきであると思っています。従来までのように、再登校だけを目標とするのではなく、様々

な活動の場、体験活動の場や学習の場を提供しながら、子ども達にエネルギーを蓄えたり様々なことを学んでいく指導をして行く必要があります、学校とは違う緩やかな時間、空間、個別指導の内容ということで、進めていく必要があるのではないかと思います。

そういった意味で、「ひろばモリーオ」や「いきいきスクール」といった活動で子どもたちが元気を取り戻していく、小中学校では校内教育支援センターを設置して個別指導に努めているということをしてはいますが、中学校の先生も、空き時間の先生が入って対応している状況であり、空き時間といっても、教材の準備をしたり事務をしたりという本来の業務がある中で対応している、というのが現状ですので、そういうところを支援していかなければならないなと思いますし、今後の教育委員会の取組みの成果に大いに期待していきたいと思っています。

(内館市長)

ありがとうございました。それでは、安藤委員をお願いします。

(安藤委員)

私は高校教育に携わる時間が長かったので、その視点も交えて話をしようと思います。

不登校対策としては、盛岡市としては、先ほど教育部長からも説明があったように、できることはすべて手厚くやっているなと感じております。ただ、不登校に陥りかけた児童生徒に対し、色々と手を尽くして状態が改善されたとしても、いずれも社会に出ていかなければならず、社会の荒波に耐えられるかが問題だと思います。

不登校の問題は、直面している問題として解決すべき課題ですが、やはり社会に出るという長いスパンで見ていく必要があるのではないかと思います。

高校生に関しても、不登校は増大傾向にあり、高卒就職者の離職率も高止まりの状態です。不登校の原因は多様であり、それから離職の原因も多様ではありますが、共通する原因としては「生きる力」の不足があると考えています。高校生についても近年、非常に精神的にもろくなったり幼くなったり、たくまさがなくなった、あるいは打たれ弱くなったというように感じる場合があります。

では、対策として何が考えられるか。私は、この「生きる力」の育て方が重要であると思います。

その前提として、さまざまな環境で「生きぬく力」、「耐え抜く力」を意識した教育が必要だと思います。例えば多くの部活動、あるいは学業において、適度なストレスは子どもたちに大きな成長を促すということは、皆さんも経験しているかと思います。これは個性を大切に現代においては、ある意味逆行する考えかもしれませんが、時には厳しく鍛える場面も、教育には必要ではないかと考えます。ただ、それを不完全な理解のまま教育現場におろすと、また別な問題を起こす可能性がありますので、教育委員会としても、その場合は現場任せではなく、研究している学校公開や事例集の作成など、具体的なバックアップが必要になるかと思います。

また、もう一つは、あのコミュニケーション能力の更なる育成、ということです。私が工業高校に勤務した時代に、採用試験の就職面接の模擬面接を担当しました。面接した生徒を見ていると、やはりコミュニケーション能力が高い生徒は就職する確率が高く、離職も非常に少ないと感じました。

結論として、コミュニケーション能力の育成に力点を置いた「生きる力」、「様々な環境で生きぬく能力」を育てることが、強靱なメンタルを持ったたくましい子どもたちの育成につながり、不登校の未然防止を主眼とした有効な対策につながると考えております。

(内館市長)

ありがとうございました。それでは、岩館委員お願いします。

(岩館委員)

私からは、盛岡市内の子どもたちの現状を踏まえて、不登校に対して思うところをお話しさせていただきます。

不登校対策において盛岡市では、相談窓口としてスクールカウンセラーの配置、教育相談室の設置など、学びの場の保障としては、モリーオ、いきいきスクールの開催などにも取り組んでいただいている、充実した支援策が講じられていると思います。

しかし、せっかくある支援を利用されずに、第三者に相談するケースも見受けられます。したがって、学校や保護者へ、改めて相談窓口の周知を図るとともに、相談員の育成に努めていただきたいと思います。また、具体的に相談から解決までの事例を保護者に知ってもらうことで、保護者が安心して利用する事に繋げられるのではないかなとも思います。

また、不登校の理由としては、人それぞれ、様々な要因があるため、その子にとってどのような支援が必要なのかを見極める必要があると思います。中には、人と関わることを苦手とする子どももいると思われることから、子どもの気持ちを尊重し、子どもの思いに寄り添って進めていただきたいと思います。同時に、保護者の不安や焦りが、不登校の子達にとって、一歩前に踏み出せないことに繋がることもある、とも思います。保護者の方の不安とか悩みを丁寧に聞いて、少しでも安心して我が子に寄り添うことができる保護者の環境づくりの手立てについても、検討していただきたいです。

盛岡市は、スクールロイヤーの導入をしておりますので、必要に応じて活用しながら、児童、保護者、そして学校現場で頑張っている先生方のためにも、丁寧な対応をよろしくお願いします。

(内館市長)

ありがとうございました。それでは、多田教育長お願いします。

(多田教育長)

まず1点目として、不登校の急増ということについてお話しします。このグラフをご覧くださいと、急に不登校が増えた年度があり、平成29年にそれまでは横ばいだったのが、急増しています。そこで何が始まったかという、教育機会確保法と言うことで、学校以外の、あるいは教室以外の場所での学びの保証・居場所づくりであって、何が何でも学校や教室に入ることだけではなく、一人ひとりの子どもの状況に応じた居場所づくりを考えていこう、とするのが内容であり、その中には、子どもの休養の必要性についても規定されている法律になります。これが始まったところで、ご覧のように急増となったわけです。

そして、それにコロナの3年間が加わり、令和4年で過去最高となりました。教育機会確保法は、こういった状況を想定した法律であり、学校・保護者が現在、この方向性に沿って進んでいるということになります。教育委員会や学校は、そういう子ども一人ひとりの居場所づくりをできるだけ多様に準備するということで作成したのが、今回のこのプランであり、校内教育支援センター、モリーオ、それからフリースクールも、教育機会確保法に基づいた子どもの居場所づくりの1つになっております。

この盛岡市のプランの令和6年度に向けての重点は、先ほど渡邊部長が説明しましたが、校内教育支援センターの充実、その子に応じた学校での居場所（図書室、保健室、校長室が良いという子もいる。あるいは一人でいたいという子もいる。）づくりについてであり、学校側にも色々と働きかけているところであります。

また、重点の一番は、教育支援センターとひろばモリーオの連携になります。ひろばモリーオは、盛岡市が誇れる、20年前から全国に先駆けてスタートした校外教育支援センターであり、そのノウハウの蓄積を、紹介していくアウトリーチ活動になります。モリーオの相談員が、各学校を回り歩き、アドバイスをして行くというもので、そういったセンター機能を、今後は充実させていきたいと考えております。

それから関係機関との間で重視したいのが、この資料左端にある「不登校対策委員会」です。さまざまな分野の委員の方を最も多く委嘱しているのが盛岡市であるというふうに捉えておりますが、フリースクールの代表の方々も来ていただき、率直に現状をお話いただいております。この不登校児童生徒支援プランの重点、関係機関との会議を今後重視していきたいこと、皆さまや委員のみなさんの意見をさらに生かしていきたいと思っております。

(内館市長)

ありがとうございました。

不登校について、令和5年度の不登校の状況や、いきいきスクールによる体験活動、校内教育支援センターの運用例などの具体的な取組状況を教育委員会のみなさんから説明していただき、御

意見をいただきました。

不登校は、昔と違ってきているということ、真の学びを保障していくことが大事であること、大変共感致しました。ただし、マンパワーの確保も考えていかなければならないこと、なぜ不登校なのかわからない子供たちも増えているということで、非常に色々と考えさせられるお話でした。

今後も皆さんと意見交換を行ないながら、連携をしてみたいと思っております。

(内館市長)

それでは次に、「ICTを活用した教育環境の整備について」に移ります。

はじめに事務局から概要説明をお願いします。

(渡邊教育部長)

「(2) ICTを活用した教育環境の整備について」ご説明いたします。

資料2をご覧ください。

「1 教育環境の整備」については、これまで、GIGAスクール構想の推進にあたり、令和2年度に、全ての市立小中学校の普通教室にWi-Fi環境を整備し、3年度には、児童生徒及び教員用の端末を配布するとともに、小学校高学年と中学校の普通教室に大型提示装置を設置いたしました。また、4年度には、ひろばモリーオでもICTを活用した学習ができるように、Wi-Fi環境を整備したところです。

「2 授業におけるICT活用」についてであります。はじめに「(1) 「ロイロノート」を活用した意見交流」を説明いたします。

ロイロノートは、子どもたちが、それぞれ自分の考えを「カード」に入力して教員の端末へ送信すると、学級全員の考えが、一度に教員の端末画面に表示される授業支援アプリです。

教員は、その画面を、大型提示装置を使って学級全員に示すことにより、友達のような考えに瞬時に触れることができ、自分の考えをさらに深めたり、それぞれの考えをもとに友達と議論を深めたりする学習を展開しております。

次に、「(2) AI型ドリル」についてであります。本市では、令和5年度にAI型ドリルを導入いたしました。

AI型ドリルは、子どもたちが、様々な教科の問題を解いていく中で、AIがその子のつまずきの原因となっているポイントを判定し、そのつまずきの解消に必要な問題が自動的に出題される仕組みになっております。

また、教員が子どもたち一人一人の学習の進捗や理解状況を把握することができ、個に応じた指導に生かすことができるものとなっております。

「3 今後の取組」ですが、AI型ドリルを中心としたICTのより効果的な活用に必要な教員のスキル向上のため、教員研修の充実を図ってまいります。具体的には、令和5年度から、文部科



学省のGIGA StuDx（ギガ スタディエックス）推進チームを講師としたオンライン研修を実施しており、今後は、教員それぞれのICT活用スキルに合わせて、多様な内容及び方法で研修会を実施してまいります。

また、子どもたちが、教室で行う授業の他、自宅での学習や、校内教育支援センターでの学習などにおいて、AI型ドリルに取り組むなど、その活用の幅を広げてまいります。

説明は以上となります。

（内館市長）

ただいま事務局から説明がありましたが、皆さんの方から意見を頂戴したいと思います。玉川委員お願いします。

（玉川委員）

ICTの活用について意見を述べさせていただきます。コロナも収束に向かい、今年度は学校訪問や学校公開で、このICTを活用した授業を見る機会が多くありましたが、参観してみて、このICTの活用は教育効果が非常に高いと感じております。今後は、こういったICT・AIなどが社会の中で必須のものとなっていくと思いますので、小中学校の時から、これらに触れながら能力を育成していくということは非常に大事であると思いますし、今後の教育の可能性を大に広げるものであると思っております。

今の説明の中にもありました「ロイロノート」は、従来までは子ども一人ひとりの意見を集約するのはなかなか時間がかかることでしたが、画面を通してすぐに集約できたり、あるいはAIドリルで、個の能力に応じた学習を進めていくことができたり、あるいは理科とか社会の授業では、資料提示も簡単に提示できますし、非常に活用の利点大きいものであると考えております。

こうした環境整備については、留意すべき点もあり、施設設備のハード面の整備についてはすぐに施策に盛り込まれて実現して行く一方、その後のメンテナンスや機器の活用能力を高めるというようなソフト面の対応についても、十分配慮していかなければならないと思います。こういった機器は、おそらく変化の大きいものであり、今、整備したものが5年後10年後どうなるか、その先を見据えた環境の整備ということが必要になってくるだろうと思います。施策において、そういうグランドデザイン・方向性を持った上で、段階的なものを見据えていくことが必要ではないかと思えます。

これらを活用するのは人ですので、教員が活用するための研修のシステムや、生徒の活用能力を高めていく方法など、人に関わる部分や将来を見据えた施策などが非常に大事になってくると思います。また、研修についても、例えばすべて教育委員会が段取りしたものをやるというようなことではなく、自らの活用能力が高めていくような意識改革にもつながる取り組みも必要になってくるのではないかと思います。以上でございます。

(内館市長)

ありがとうございました。それでは、佐々木委員お願いします。

(佐々木委員)

去年から今年にかけて、ICTを活用した授業を多く見させていただき、様々な場面でタブレットや大型の提示装置を使った授業がありました。私は小学校の教員でしたので、算数の授業で、図形に補助線を入れたりして立体図形の見えないところに補助線を入れて面積を求める授業など、非常にわかりやすいと感じました。かつては、できる子は理解するが、理解にもうちょっと時間欲しいという子どもがいましたが、今ではそういう子どもたちも一瞬にして理解できるというような瞬間が非常に多かったと思っています。

また、先ほどロイノートの話がありましたが、一人ひとりの考えや意見が全部画面に出てくるということで、ボタンを1つ押すだけで拡大したり、全員の意見がわかり、手を挙げて話せない子どもにとっても、自分の考えがみんなの前に示せることになり、有用感とか存在感を感じさせることができ、子どもたちの心を育てることにつながるものであると感じました。

また、早く終わった子どもが発展的なソフトを使い、どんどん前に進むことができることも、今までとは違った新しい手法である感じますので、これから多いに活用して欲しいなと思います。

課題としては、教師によって得手不得手があることであり、機器に堪能な先生というのは、周りの子どもたちも見つつ、その子機器のトラブルに対応することができるが、不得手な先生というのはトラブル解消にかかり切りになってしまい、周りの子たちが授業から離れていってしまうような場面もありました。どの先生も、操作に慣れるような研修も必要であるなど感じております。

以上です。

(内館市長)

ありがとうございました。それでは、多田教育長お願いします。

(多田教育長)

私からは、ICTの効果、環境整備の話、教員の研修についてお話をしたいと思います。

まず、このICTを使ったGIGAスクールについては開始されて4年目になりますが、使えば使うほど効果や可能性が非常に広がっていくというのが、国全体の捉え方だと思っています。例えば、様々な学びの場面で活用されており、例えばインフルエンザ等で学級・学年閉鎖中に自宅待機中の子どもたちに対するオンライン指導・タブレット使った学びや、特別な支援を要する児童生徒に対しては視覚に訴えながら様々な動画を使うということで効果が見えてきております。また、先ほどお話になった不登校の児童生徒や、病気療養中の院内学級等のオンラインの指導など、年々

その可能性が広がってきています。

また、今回校長を対象にしたアンケートの結果を国でまとめており、それによると、個別最適な学びへの効果が非常に顕著であり児童生徒の関心・進度に応じた学習が大変効果的であるという点、多くの児童生徒の積極的な授業参加につながっている点、協働的な学びという意味で、対話的な時間がタブレットを通して確保されていく点、教員の授業準備の負担軽減につながる点が挙げられております。我々のときは、例えば社会の授業では、世界地図の掛図を教室に持って行くことから始めて、その世界地図が古くて国の名前が違う、ということもありましたが、今は刻々と変わる名称も常に正しい表示ができ、そういった効果も大きいと思います。

また、例えば下橋中学校においては、校内教育支援センター、あるいは家庭で過ごす不登校の生徒に、オンライン授業を継続して実施しており、また他の学校では、スクールカウンセラーとの相談や教員との相談をオンライン、チャットで行うなど、外出できずに引きこもる状況の子どもに対する心のサポートを、ICTを使うことで効果的に行っています。

2つ目について、現在、学校内は普通教室のみが標準的にWi-Fi整備されていますが、特別教室や校内支援センターについても、今後さらなる活用のためには、こういった環境整備が必要になってくるのではないかと思います。

それから、3つ目の教員の研修についてですが、盛岡市内に限らず、県内では教員が20～30代の教員と50代の教員の2つの分布の山があり、ICTに関しては若手の20～30代は堪能であり、年齢が進むほどなかなか追いつかないというのが現状であります。GIGAスクール開始当初は、ICT支援員を市教委から派遣していましたが、それが3～4年経ってきて、各学校に1人程度は、ICTを得意とする先生が生まれつつあります。今後も、研修などを通してそういった状況がさらに広がっていけばいいなと期待しております。以上でございます。

(内館市長)

ありがとうございました。

ICTの取組みについて、少し否定的な意見も出るのかなと想像としていましたが、そうではなかったことに少し驚きました。私自身も、ことに学習において知識を吸収するにあたっては、ICTを活用するのが非常に効果的であると感じており、人と人の対面が大事なこともあると思いますが、ICTは非常に大切なことだと思いました。

次に、先生方の研修の話もありました。5年、10年先には変わってるかもしれないので、やはりそこも気を付けて、今のシステムだけでなく、先のことも考えていかねばならないと思いました。また、最後の多田教育長からのお話は大切なもので、個別の教育環境にとっても非常に有効なものでありながら、教員の皆さんの負担の軽減にも繋がっているのは大事な観点だと思っています。皆さんありがとうございました。

最後になりますが、子どもたちひとりひとりの学習進度に応じた学習、先ほどの議題にありまし

た不登校の子どもたちや長期入院、障がい等で登校できない子どもたちにも、それぞれに合った最高の学びを提供して行くということも大切だと思っております。

(内館市長)

それでは、3点目の「盛岡市の子どもたちの活躍について」、教育委員会から概要説明をお願いします。

(渡邊教育部長)

「(3) 盛岡市の子どもたちの活躍について」ご説明いたします。

資料3をご覧ください。

今年度も、盛岡市の子どもたちは、スポーツをはじめとした各種競技に意欲的に取り組み、全国大会への出場など、多くの活躍が報告されております。

一部となりますが、主な活躍をご紹介します。

「1 小学生児童の活躍」では、No. 5の城北小学校ですが、第66回吹奏楽コンクール東北大会金賞の成果を挙げ、東日本大会に出場いたしました。

次に、「2 中学校生徒の活躍」では、県大会、東北大会での入賞をはじめ多くの活躍がありましたが、資料3 ページNo. 43から49までに記載のとおり、第44回東北中学校体育大会の陸上競技及び柔道競技で優勝いたしました。

続いて、No. 56の見前中学校2年生は、アジアジュニア武術選手権大会で優勝し、また、No. 57の下小路中学校女子チームは、県中学校駅伝大会で三連覇し、今月16日には全国大会出場を予定しております。

資料4 ページ目をご覧ください。

文化部においてもNo. 79仙北中学校の、第76回全日本合唱コンクール全国大会同声合唱の部金賞など、多くの成績が報告されております。

次に、「3 市立高等学校生徒の活躍」では、No. 1とNo. 3の3年生生徒は、ジュニア五輪カップ武術太極拳で優勝し、また、アジアジュニア武術選手権大会出場を果たしております。

盛岡市の子どもたちが、一生懸命に取り組んで活動し、多くの成果を挙げた一例をご紹介します。説明は以上となります。

(内館市長)

事務局から説明がありましたけれども、皆さんから意見を頂戴したいと思います。安藤委員お願いいたします。

(安藤委員)

今年も運動部をはじめ、あるいは文化面も含めて盛岡市の子どもたちの活躍を目にしたり、報道等で知るたびに、非常に嬉しく思っています。また、子どもたちは未来の宝であり、盛岡の将来そのものでもあります。そういった子どもたちの活躍は、市民県民に感動を与え、市民に元気と活力をもたらしてくれると考えています。個人的には、上田中学校で開催された教育振興運動第三地区集会に参加した際、有志による合唱と上中太鼓の発表がありましたが、体育館全体的に響き渡るような素晴らしい、迫力にあふれた発表であったのが印象に残っています。また、実践発表も、放送委員会と生徒会執行部が実質的に進行し、大変立派で、大人顔負けの発表対応を目の当たりにして、昔と比べて今の子どもたちは大変すばらしく、そんな子どもたちの様子を目の当たりにして、参加して非常に良かったと思えました。盛岡市の子ども達が様々な活動が、生きる力につながり、その中で特に優れた成績を収めた児童生徒が顕彰されたわけですが、積極的に取り組んだすべての子どもたちにエールを送りたいと思います。

以上でございます。

(内館市長)

ありがとうございました。それでは、岩館委員お願いします。

(岩館委員)

児童・生徒達が、スポーツや文化活動において輝かしい成績を残したことは喜ばしく、努力の結果であると思っております。また、先日、玉山地区の第7ブロックの教育振興運動の中で、渋民中学校の群読劇を見ました。生徒達の成長に、目頭も熱くなるほどの頑張りを見ましたが、その中には、演じる部分だけでなく、衣装を作ることや照明も生徒たちが全部やっており、子どもたちが先輩たちの姿を見て憧れている様子を見て、そういった部分も素晴らしいと思えました。

一方で、資料の他にも、スポーツや文化、芸術様々な分野で活躍している子どもたちも、数多くいると思っております。大切なのは、大会などで思うような結果を残せなかったとしても、一生懸命取り組んできたひとりひとりの姿勢を評価していただきたいと思います。子どもたちが色々なことに興味、関心を持ってチャレンジする気持ち、楽しむ気持ち、夢中になってやってみようとする意欲を育む環境作りをこれからも大事にしたいと考えています。以上でございます。

(内館市長)

ありがとうございました。多田教育長お願いします。

(多田教育長)

私も渋民中の群読劇を見て、非常に感動と意義深いものを感じました。というのも、生田小学校があと2年で閉校が決まっており、子どもたちや保護者も不安が大きいところ、群読劇の主役が生

出小学校の出身の生徒ということもあり、不安を吹き消すかのような迫力ある素晴らしい発表を見て、生出小の児童もこうやって中学生となり渋民中を作り上げていくんだというイメージを持てる、非常に立派な発表であったと思います。

それから、今年度の子どもたちは、特にコロナ禍を乗り越えて部活動を非常に充実させてきた子ども達であり、中止となった先輩たちの分も自分たちで頑張ろうとする姿が見られたと思います。

また、活躍した児童生徒の市長表敬訪問の時間をとっていただき、子どもたちがその場で見せる誇らしい姿、市長から励ましていただいたり、感謝の心を忘れないでと市長からかけられた言葉を胸に刻む姿を見て、それらがそれぞれの学校に持ち帰られるんだろうなど、大きな手応えを感じたところでございます。以上です。

(内館市長)

盛岡市の子ども達の活躍については、私も就任以来、たくさんの子どもたちが報告に来てくださりとても嬉しく思っております。その時に、子どもたちも緊張している様子があるので、私は2つのことをいつも話しています。1つ目は、人生一回しかないの、とにかく今を楽しんで一生懸命やってね、ということ、2つ目は、いつか大人になった時に、この大会のことや緊張しながら市長室に行って、みんなから祝福されたことを思い出して、そういうことができる大人になれるように頑張るってね、というようなことを話しています。

いずれ、子どもたちは未来の盛岡の宝物と思っておりますので、今後とも、子どもたちが輝いていけるように願っております。ありがとうございました。

(内館市長)

予定されていた3項目については以上でございますが、「その他」についてということですが、皆さんから何かありますか。

～教育長、教育委員からは特になし。～

それでは、無いようでございますので、以上で議長を降りさせていただきます。

#### 4 閉会

(中嶋次長)

皆さま、本日は大変お疲れさまでございました。

以上を持ちまして、令和5年度盛岡市総合教育会議を閉会させていただきます。本日は皆さまありがとうございました。

以上